

令和 2 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05556・19K20767

研究課題名（和文）近代日本における「ペルシア／波斯」美術コレクション形成と日本画・洋画・工芸の展開

研究課題名（英文）Formation of "Persian" Art and its Impact on Nihonga (Japanese-style Painting),  
Yoga (Western-style Painting), and Crafts in Modern Japan

研究代表者

神田 惟 (KANDA, YUI)

東京大学・東洋文化研究所・特任研究員

研究者番号：20823462

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の遂行により、1950年代後半から1970年代後半にかけて、日本画家・洋画家・工芸家たちに加え、古美術商、学者の三者が協調して、日本と文化的な紐帯を有する「ペルシア」なる独自の概念を生み出していたこと、イスラーム美術工芸品の中でも、このイメージに合致するタイプの作例が重点的に収集され、作家の創作の源となっていたことが始めて明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、オリエンタリズム研究という文脈からも、イスラーム美術工芸品の収集史研究という文脈からも、近代日本におけるアジア憧憬研究という文脈からも研究の対象とされてこなかった近代日本におけるイスラーム美術工芸品収集の思想的背景と傾向について、明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research was to examine the unique cultural context whereby objects of Islamic Art appealed to Japanese audience, with a particular emphasis on "Persian" pottery which was avidly amassed and depicted by Japanese painters from the mid 1950s to the early 1970s.

研究分野：イスラーム美術史

キーワード：イスラーム美術史 アジア憧憬 オリエンタリズム ペルシア美術（ペルシャ美術、波斯美術） ペルシア陶器（ペルシャ陶器、波斯陶器）

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

18世紀末以降、オリエント美術史(西アジア[中東]美術史)研究は、西アジア美術コレクションの豊富な欧米を拠点とする研究者たちによって主導されてきた。このことはすなわち、彼らの視野の範囲外にある非欧米圏において近代以降形成された西アジア美術コレクションに関しては、現在に至るまで、その学術的価値の評定や、作品がもたらされた特定の非欧米圏の国の文化への影響の考察が、十分に試みられていない状況にあることを意味する。その傾向はとりわけ、7世紀後半以降の西アジア地域で制作された美術品を研究対象とする研究(=イスラーム美術史研究)において顕著である。かかる状況に鑑み、本研究では、西アジア美術コレクションの形成された非欧米圏の国の一例として日本をとり挙げ、西アジア美術の中でもイスラーム化以降に比定される「ペルシア/波斯」美術を分析対象とし、前者における後者の受容の諸相を、とりわけ大正時代以降について、明らかにすることを旨とする。

## 2. 研究の目的

本研究の目標は、第一に、大正時代以降、古美術商を介し我が国に流入した西アジア美術品の学術的価値の見直しを図ることである。第二に、イスラーム化以降に比定される「ペルシア」美術品が当時の国内の学界においてどのように解釈され、近代日本画家・洋画家・工芸家の創作活動にどのような影響を及ぼしたのかについて、明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

上述の第一の目標の達成のため、具体的には、1946年以降の正倉院宝物の一般公開を契機とした「ペルシア/波斯」文化への社会的関心の高まりを受け、国内で好んで収集された特定のタイプの「ペルシア/波斯」美術品に焦点を当て、イランにおける学術的発掘で得られた来歴が確実な考古遺物と照合することで、真贋の鑑定を行う。また第二の目標の達成のためには、作家たち自身の収集した作例やそれらを題材とした作品とその評価に加え、彼ら自身の発言や、彼らの交友・師弟関係の網羅的な検証を行う。

## 4. 研究成果

本研究の遂行により、1950年代後半から1970年代後半にかけて、日本画家・洋画家・工芸家たちに加え、古美術商、学者の三者が協調して、日本と文化的な紐帯を有する「ペルシア」なる独自のポジティブな概念を生み出していたこと、イスラーム美術工芸品の中でも、このイメージに合致するタイプの作例が重点的に収集され、作家の創作の源となっていたことが始めて明らかになった。

本研究の学術的意義は、オリエンタリズム研究という文脈からも、イスラーム美術工芸品の収集史研究という文脈からも、近代日本におけるアジア憧憬研究という文脈からも研究の対象とされてこなかった近代日本におけるイスラーム美術工芸品収集の思想的背景と傾向について、明らかにした点にある。

本研究の成果は、東文研セミナー、神戸大学国際文化学研究推進センター主催研究会、並びに日本アジア協会主催の Young Scholars Program 2019 にて、日本語および英語の口頭発表の形式で研究成果を公表した。中でも、東文研セミナーに関しては、自身が企画・運営を主導した。これらの機会に得たフィードバックに基づき、現在、日本アジア協会の学会誌である Transactions of the Asiatic Society of Japan 次号掲載予定の論文(英語)を修正中である。当該論文においては、1950年代後半以降の日本における「ペルシア(ペルシャ、波斯)」観形成のプロセスを、 展覧会におけるペルシア陶器の展示の変遷、 国内における「ペルシア」陶器の収集傾向の変遷、 画家たちによる創作と古美術商・学者との交流の変遷、を辿ることによって明らかにする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 神田 惟
2. 発表標題 描かれたペルシャ（波斯）：戦後の日本画家・洋画家が見たペルシャ陶器
3. 学会等名 東文研セミナー「近代以降日本人は『イスラーム美術』品をどう見たか」（2019年3月7日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神田 惟
2. 発表標題 大正～昭和期の日本における「ペルシア／波斯」観の形成とイスラーム美術工芸品の受容について（The Formation of the Idea of "Persia" and its Impact on the Collection and Reinterpretation of Islamic Art in Japan from the 1920s to the 1980s）
3. 学会等名 神戸大学国際文化学研究推進センター主催研究会・イスラーム美術コレクションの形成と普及 東洋と西洋の眼差しの交叉（2019年9月30日）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KANDA, Yui
2. 発表標題 Depicting 'Persia': Collection and Reinterpretation of Persian Ceramics in Japan during the Period of High Economic Growth
3. 学会等名 The Asiatic Society of Japan (Young Scholars Program 2019)（2019年11月12日）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap  
<https://researchmap.jp/yuikanda/>  
東文研セミナー「近代以降日本人は『イスラーム美術』品をどう見たか」のお知らせ  
<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?id=WedJan301023192019>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----